

## A-4

### アミ語は本当に能格言語なのか

今西一太\* (株式会社エス・アイ代表取締役)

**要旨:** アミ語が能格性を持つという主張の妥当性を検討する。Liao (2004) の基準に基づいて無標の二項節および能格性・対格性の原型を定義し、それにアミ語がどう当てはまるかを見ていくと、以下のようになる。

[1] 動詞の形態的標示が無標: AV も PV も無標ではない。[2] 談話における頻度が高い→PV より AV のほうが頻度が高い。[3] 分布が広い(命令文などの文でも使用可能)→分布に差はなく AV も PV も命令文で使える。[4] 習得の順序が早い→危機言語のため調査不能。[5] その節のパターンを生産的・規則的に作り出すことができる→AV も PV もどちらも生産的・規則的。[6] 意味的な他動性が高い→AV でも PV でも「特定の人を殺す」などの他動性の高い文を作ることができる。以上から、アミ語は能格言語と対格言語のちょうど中間あたりに位置すると考えられる。「アミ語は能格言語」という主張は能格性の定義の強さと無標の二項節の定義によって変わってくる。

#### 1. 導入

本発表では、アミ語<sup>1</sup>と能格性の関連について述べる。アミ語を含む台湾、フィリピン、およびその他の一部の地域のオーストロネシア語族の言語は類型論的な分類として「フィリピン型言語」と呼ばれ、特異な特徴を持つものとして知られている。そして、このタイプの言語については一部の研究者が「能格性を持つ」と主張している一方、「能格性を持つというべきではない」という主張を行う研究者も多く存在し、見解の一致を見ていない。そしてアミ語はこの「フィリピン型言語」に含まれ、「アミ語は能格言語である」という主張が見られる。本発表では、アミ語が能格性を持つという主張の内容を見たとくえで改めて能格性の定義を検討し、そのうえで「アミ語は能格言語である」という主張の妥当性を検討する。

#### 2. アミ語と能格性

##### 2.1. 能格性の一般的な定義

能格性の定義としては一般的に Dixon (1994) のいう「他動詞節の被動者項と自動詞節の唯一項が同じ扱い」という定義が受け入れられている(以下は Dixon 1994: 10 よりジルバル語の例)。

- (1)a.  $\eta$ uma          banaga-n<sup>o</sup>u          「父が (S) 戻ってきた」  
父(絶対)          戻る-非未来
- b. yabu           $\eta$ uma- $\eta$ gu          bura-n          「父が (A) 母を (P) 見た」  
母(絶対)          父-能          見る-非未来

(1) においては他動詞節の被動者 (P と呼ぶ) と自動詞節の唯一の項 (S と呼ぶ) が同じ標示を受けており、これは絶対格と呼ばれる。それに対して他動詞節の動作主 (A と呼ぶ) のみが別の標示を受けており、これ

\* imanishik923@gmail.com

<sup>1</sup> アミ語はオーストロネシア語族に属する言語で、述部が文頭に来る語順が無標の従属部標示型の言語である。台湾の東部海岸沿いに住むアミ人によって話されている言語である。アミ人自体は 15 万人~20 万人いるが、40 代以下の世代はアミ語を流暢に喋ることが出来ない事が多いため、実際の母語話者は民族数の半分以下である。文字表記で注意を要するものは以下: <e> = [ə], <c> = [ts] (ただし<i>の前で[te]), <s> = [s] (ただし<i>の前で[se]), <y> = [j], <d> = [t ~ k], <'> = [ʔ], <o> = [u ~ o], <i> = [i ~ e]。本稿で用いる例文のうち、出典を明示していないものは著者自身がアミ人の調査協力者(台東県長濱出身の中部方言話者)から聞き取り調査で得たものである。

は能格と呼ばれる。このような、S と P が同じ標示を受ける現象を能格性と呼ぶのが一般的である<sup>2</sup>。

## 2.2. アミ語は能格言語であるという主張

アミ語は「フィリピン型言語」に属し、能動態に類似した「動作主態 (Agent Voice, AV)」と受動態に類似した「被動者態 (Patient Voice, PV)」の有標・無標の関係が明らかでなく、どちらも形態的に有標である。

- (2)a. Mi-patay=to      kako      to=dadipis 「私はゴキブリを殺しました」  
 AV-死=完了      1 単主      対=ゴキブリ
- b. Ma-patay=to =ako      ko=dadipis 「私はゴキブリを殺しました」(直訳: ゴキブリは私に殺されました)  
 PV-死=完了=1 単属      主=ゴキブリ
- c. R<om>akat      kako. 「私は歩いています。」  
 歩く<OM>      1 単主

それぞれ (2a) は AV、(2b) は PV の例である。動詞を見ると分かるようにどちらの動詞にも *mi-*、*ma-* という接辞が付加されており、一見して形態的な有標・無標の関係が明らかではない。能動態・受動態（または逆受動態）であれば、通常能動態のほうが明らかに無標である。このような「対称的な (Foley 2008)」態の交替がフィリピン型言語の特徴である。

そして、Wu (2006) は、アミ語文法において Voice Morphology、Voice Oppositions、Case Marking、Grammatical Relations の 4 つの現象を分析することにより AV と PV を比較し、その結果 PV のほうが無標の態である、すなわち PV が無標の他動詞文であり、AV は逆受動、アミ語は能格性を持つ、という主張を行っている。Wu の主張をまとめた表を以下引用する。

表 1 アミ語の AV と PV (Wu 2006: 454)

Grammatical Phenomena	AV Pattern	PV Pattern
Voice Morphology	basic	basic
Voice Oppositions		basic
Case Marking		basic
Grammatical Relations (in RC and WH-Q formation)		basic

[1] Voice morphology : アミ語では、上記 (2ab) の例にみられたように、AV も PV もどちらも形態的には有標であるため、Wu はこの点について、両者ともに **basic** (無標) のパターンである、と認識している。

[2] Voice oppositions : この点については、道具焦点、場所焦点と呼ばれる構文の解説が必要となる。

- (3) Sa-pi-patay    no=mato'asay    to='oner    ko=sapaiyo    no='edo.    (Wu 2006: 347)  
 SA-PI-死    属=年寄り    対=蛇    主=薬    属=ネズミ

「老人が蛇を殺す道具は殺鼠剤だ／老人は殺鼠剤で蛇を殺す」

(3) における *sa-* というのはいわゆる「道具焦点」と言われる態の一種と考えられている。このパターンの構文を作る際、(2ab) の AV、PV と各標示を比較してみると、PV と同じように属格の名詞句が動作主を表している。Wu はこれを、道具焦点などの構文を作り出す基本となる構文が PV である、と判断し、AV ではなく PV が **basic** であると判断する基準の 1 つにしている。

<sup>2</sup> 能格性には統語的な能格性も存在するが、本稿での議論は形態的な能格性に絞ってするめることにする。

[3] Case marking : (4) のような AV の文において被動者を表すのに to= が用いられる。この to= は被動者だけでなく、以下 (5) のように時間などの付加語的な語句を表すのにも用いる。Wu はこのことなどを根拠に to= が表す語句は付加語であり、AV は自動詞文、逆受動態である、と述べている (Wu 2006: 358)。

(4) Mi-patay=to      kako      to=dadipis.      「私はゴキブリを殺しました」  
 AV-死=完了      1 単主      対=ゴキブリ

(5) Ma-tayal      kako      to=dadaya.      「私は夜に働きます」  
 AV-働く      1 単主      対=夜

[4] Grammatical Relations (in RC and WH-Q formation) : この項目に関して Wu はあまり明確な説明を行っていないが、Wu が AV を自動詞文と捉えてその主格名詞句を S (一項節の唯一項) と考えており、そのことが関連しているようである。ある特定の文法的な現象に置いて AV の主格 (Wu のいう S) と PV の主格のみが文法関係を持つ現象が観察されており、Wu はこれを能格性の現れであるとみているようである。

### 3. 能格・対格性のプロトタイプと連続体

本節ではアミ語の能格性の議論を行う前に今西 (2020) と同様の方法論で「無標の 2 項節」および「能格性」の定義を議論する。Liao (2004) は以下の定義を用いて無標の 2 項節を議論している<sup>3</sup>。

- ・動詞の標示が無標である
- ・談話における頻度が高い
- ・分布が広い (命令文などの文でも使用することができる)
- ・習得の順序が早い
- ・その節のパターンを生産的・規則的に作り出すことができる
- ・意味的な他動性が高い

この Liao の定義全てを満たすものを完全に無標な、つまり原型的な 2 項節と考える。能格性の定義は **A** だけが違う標示で、**P** と **S** が同じ標示を受けることである。ただし、**2 項節と能格性** について、少なくとも以下の 2 種類の定義の強さが可能であり、それによって能格性の適用範囲が変わる。

**a) 能格性 A (強い定義、狭義の能格性) : S と、Liao の言及する定義全てを満たす原型的 (完全無標な) 二項節の P が同じ標示である。** フィリピン型言語は AV も PV も形態的に有標である。つまり、a) の定義を採用した場合、フィリピン型言語には定義全てを満たす原型的な二項節が (少なくとも広範で生産的な形では) 存在しないため、そもそも能格性も対格性もないことになる。

**b) 能格性 B (弱い定義、広義の能格性) : S と、定義全ては満たさないがその多くを満たす比較的無標な二項節の P が同じ標示である場合も能格性に含む。** この定義を採用した場合、例えば「動詞の標示が無標である」という基準を満たさないフィリピン型言語でも能格性の範疇に含めることができる。

<sup>3</sup> Liao はこの基準の中の一部を「基準とするには問題がある」と述べている。例えば、「動詞の標示が無標である」という基準について、一部のポリネシアの言語で「無標の 2 項節」と扱われている節において動詞の標示が有標であることを挙げ、基準として使用しないと述べている。しかし上記の基準は一般的に無標な二項節を示すのに問題がないと本章では判断して使用する。

能格性 A を「狭義の能格性」、能格性 B を「広義の能格性」としてまとめたのが以下の表である。

型	狭義の対格型	対称的/広義の対格型	対称的	対称的/広義の能格型	狭義の能格型
P=S 標示節	有標: 受動態	比較的有標	同程度	比較的無標	無標
A=S 標示節	無標	比較的無標	同程度	比較的有標	有標: 逆受動
例	日本語/英語			一部のフィリピン型言語	ジルバル語
					能格性 A
					能格性 B

図 1 能格・対格連続体と広義・狭義の能格・対格性

日本語や英語に関しては A=S 標示である対格型の二項節が無標である度合いが非常に高く、原型的な対格言語に近い「狭義の対格型」に属する。逆にジルバル語では P=S 標示の無標の度合いが高く、原型的な「狭義の能格型」に近い。両者を「対格型」「能格型」と呼ぶことには異論がないと思われる。第 4 節ではアミ語の能格性の分析を行ったうえでこの図の中のどこにアミ語を位置づけることができるかを議論する。タガログ語 (AV の他動性が低い: Aldridge 2012) やアタル語 (PV の頻度が高い: Huang 1994) などの一部のフィリピン型言語においては PV は完全に無標ではないもの比較的無標性が高く、「広義の能格性」に属すると言える。

こういった能格性に連続体を認めるアプローチは Huang and Lin (2012) に見られる。彼らは「能格連続体」ergative continuum というアプローチをとり、「どの言語が最も能格性を持っているか、その中である言語はどの部分に位置するか」という観点から、アタル語を連続体の中に位置づける手法で研究を行っている。ただ、彼らは原型的な対格型言語まで含めた全体像に関しては議論していない。また、Aldridge (2011) はマダガスカル語、タガログ語、セデック語を比較して、その中でマダガスカル語が一番能格言語としての特徴を強く持つことを述べている。Aldridge (2011) の主な目的は能格言語が対格言語に歴史的に変化している可能性を示すことなので少し主張内容は異なるが、様々な要素からある言語の能格性の度合いを示しているという点では類似のアプローチと言えるかもしれない。

## 4. アミ語の能格性

### 4.1. アミ語における無標の二項節

それでは、以上の定義・方法論と図を使用してアミ語の能格性を分析するとどうなるのかについて本節で述べようと思う。前節で述べた Liao の述べる 6 つの定義それぞれに関してアミ語における無標の二項節を分析すると、それぞれ以下のような結果になる。

[1] 動詞の標示が無標である: これはすでに述べたように、AV も PV もどちらも接辞が付加するため、どちらの方が無標であるとは言いづらい状態になっている。

[2] 談話における頻度が高い: 筆者が Sing 'Olam 2006 を用いて談話の中の頻度の調査を行ったところ、AV:PV の数は 45:34 だった。能格性を主張するためにはむしろ PV の頻度のほうが高くある必要があり、一般的な能格言語では逆受動の頻度は 1 割かそれ未満であることが多いが (Seržant 2021)、結果はその逆となり、少なくともこの談話では、アミ語は対格言語に近いところに位置するということが判明した。

[3] 分布が広い（命令文などの文でも使用することができる）：AV と PV を比較して分布に特に差があるということではなく、どちらも命令文で使用をすることが可能である。

(6) a. Pi-patay to=dadipis. 「そのゴキブリを殺せ」 (cf. mi-patay 「殺す」)

命令-死 対=ゴキブリ

b. Patay-en(=iso) ko=dadipis. 「そのゴキブリを殺せ」 (patay-en 「殺される、殺される」)

死-PV(=2 単属) 主=ゴキブリ

また、AV のみでしか使用できない、PV のみでしか使用できない語が大規模かつ広範に存在する場合、それも無標性の証拠として考えることが可能であるが、そのような形で大規模にどちらかの態しか使用できないということはない。

[4] 習得の順序が早い：アミ語は危機言語であり子供による新たな習得が生じていない。そのため、この項目の調査を行うことは困難であり、どちらの習得がより早いかは不明とせざるを得ない。

[5] その節のパターンを生産的・規則的に作り出すことができる：AV も PV も生産的に作り出すことができ、例えば外来語などを使用して新しい語を作り出すことも可能である。

(7) a. mi-kayki 「会議する (AV)」 b. pa-tikami-en 「手紙を書きなさい (PV、pa-は使役)」

(7a) の kayki は日本語の「会議」より、(7b) の tikami は日本語の「手紙」より取り入れられた外来語である。この両者がアミ語に取り入れられたのは日本が台湾を植民地支配していた 1895-1945 年の間であることは間違いなく、少なくともこの時点では AV の mi- も PV の -en にも外来語に生産的に付属することができる接辞であったことが明らかである。

[6] 意味的な他動性が高い：この点は議論が難しい。例えば PV の一種である -en は他動性が高い two-participant clause でのみ用いられる一方 (例(8))、同じ PV とされる ma- は同じように他動性が高い場合とそうではない場合の両方に用いられる (例 (9))。mi- に関しては、他動性が低い場合と高い場合の両方の例が可能である (例 (10))。

(8) Patay-en=ako ko-ra dadipis. 「私はそのゴキブリを殺します」

死-PV-1 単属 主-それ ゴキブリ

(9) a. Ma-patay=to ningra ko-ra dadipis. 「彼はそのゴキブリを殺した」

PV-死=完了 3 単属 主-それ ゴキブリ

b. Ma-patay=to ko-ra dadipis. 「そのゴキブリはもう死んでいる」

PV-死=完了 主-それ ゴキブリ

(10)a. Mi-pacok ko-ra tamdaw to=fafoy. 「その人は豚を殺した」

AV-屠殺 主-それ 人 対=豚

b. Mi-dangoy kako. 「私は泳いだ」

AV-水泳 1 単主

他動性が低い例を表すことが多いという点で AV (mi-) のほうが有標であると言える可能性もあるが、mi-でも他動性のかなり高い例は表すことができるため、どちらが無標であるということと言い切るのは難しい。

以上のように、本章の定義における「無標」においては、AV と PV のどちらもほぼ変わらないか、むしろ AV のほうが無標である証拠がある場合もあるということが分かった。Wu 2006 の定義では PV のほうが無標であるということを考えると、無標な二項節をどのように定義するかによって、アミ語における AV/PV の無標性の分析は変わってくるということが分かった。

#### 4.2. 能格・対格の対立の中でアミ語はどこに位置するか

以上、本章で採用したアミ語において AV (A=S 標示の) 節と PV (P=S 標示の) 節を比較してみると、一部の項目では AV が無標であると判断でき、PV が無標であると考えられる要素は少なく、多くの項目ではどちらの無標・有標性も見ることができない、という結果であった。上記の図に本章の方法論での分析と Wu の分析に基づいてアミ語を位置づけると、以下のようになる。

型	狭義の対格型	対称的/広義の対格型	対称的	対称的/広義の能格型	狭義の能格型
P=S 標示節	有標: 受動態	比較的有標	同程度	比較的無標	無標
A=S 標示節	無標	比較的無標	同程度	比較的有標	有標: 逆受動
本発表			アミ語		
Wu 2006				アミ語 <sup>4</sup>	

図2 能格・対格連続体とアミ語

以上から、以下の2点を主張することができるだろう。

- [1] 無標の二項節をどのように定義し、各基準をどれくらい重要視するかで、アミ語が能格性を持つかどうかの分析は変わる。
- [2] 少なくともアミ語が「狭義の能格性」を持っているということはない。「能格性」「無標の二項節」の定義によって、「広義の能格性」を持っているか、あるいは能格性をほぼ・全く持っていない（つまり対称的な言語である）のどちらかであると言える。

このことからいえるのは、「アミ語が能格性を持つかどうか」という議論自体にはあまり意味がなく、むしろ能格性の定義とそれぞれの定義にアミ語がどの程度当てはまるかの方が重要、ということであろう。「アミ語が能格性を持つ」かどうかは、定義によって Yes とこたえることもできるし No と答えることも可能であり、それはどちらも正しい。それよりも重要なのは、アミ語が能格性を持つ言語とどのような共通点を持っており、その共通点に注目することでアミ語や能格言語に関するどのような事実が明らかになるのか、という点であり、「アミ語が能格性を持つ」という主張そのものにはアミ語やほかの言語に対する理解を深めることができる要素があまりないというべきだ。

Huang and Lin (2012) のアプローチと同様に、この図を活用することで、アミ語以外の「フィリピン型」の言語とアミ語を比較することも可能である。例えば、Huang (1994) によると、アタヤル語はアミ語と比べて談話での PV の頻度が AV の頻度よりも明らかに高い。この要素だけから判断すると、アタヤル語はアミ語よりも能格性に近い場所に位置していると言える。

<sup>4</sup> Wu (2006) は Aldridge (2011) などと同様、PV だけでなく AV にも有標な側面があるということに split ergativity という用語を用いているが、これは言語類型論で用いられる split ergativity という用語とはかなり違った意味の用法であり、その他の split ergativity を持つといわれる言語との比較には注意が必要である。

## 5. 結論

本章では「アミ語が能格言語である」という主張を検討するため、まずは能格性の定義を検討し、対格型言語と能格型言語を両端に持つ連続体を示す図を得た。

そして、Liao 2004 の基準をもとにアミ語の具体例を用いて無標の二項節を分析すると、AV/PV どちらも明らかに無標であるとは言いづらいということが判明した。Wu の用いている定義では PV のほうが比較的無標であるということから考えると、無標の二項節の定義によってアミ語が能格性を持つかどうかの分析は大きな影響を受けることが判明した。英語の能動態・受動態やジルバル語の能動態・逆受動態で同じような分析を行ったところで無標・有標性についてこのような揺れが起こることは考えられず、ここが、原型的な対格性・能格性を持つ英語、ジルバル語などとアミ語の大きく違う点である。よって、アミ語をジルバル語などの原型的な能格言語のグループに含めることには問題があり、能格性を持つと考えるとしても、少なくとも「アミ語は広義の能格性を持つ」など、「狭義の能格性」を持つ言語とは区別があることを明示すべきである。

そして、「アミ語が能格性を持つ」という主張は能格性の定義の強さと定義に使う各要素をどの程度重要視するかによって変わってくるものであり、重要なのはアミ語が能格性を持つかどうかということではなく、アミ語と能格言語の共通点を相違点を分析することで言語事実として何がわかってくるのか、ということに注目することである、ということ述べた。

## 参考文献

- Aldridge, Edith. (2011) "Antipassive in Austronesian alignment change." In Dianne Jonas, John B. Whitman & Andrew Garrett (eds.), *Grammatical change: Origins, nature, outcomes*, 332–346. Oxford: Oxford University Press.
- Aldridge, Edith (2012) "Antipassive and Ergativity in Tagalog" *Lingua* 122:192-203.
- Dixon, R.M.W. (1994) *Ergativity*. Cambridge University Press.
- Foley, William (2008) "The place of Philippine languages in a typology of voice systems." In: Austin, P., Musgrave, S. (Eds.), *Voice and Grammatical Relations in Austronesian Languages*, 22-44. Center for the Study of Language and Information, Stanford.
- Gertdz, Donna, B. (1988) "Antipassives and causatives in Ilokano: evidence for an ergative analysis." In: R. McGinn (Ed.), *Studies in Austronesian Linguistics*, 295–231.
- Huang, Lillian M. (1994) "Ergativity in Atayal." *Oceanic Linguistics* 33, 129-143.
- Huang, Zong-Rong and Kuo-Chiao Jason Lin (2012) "Placing Atayal on the ergative continuum." *LSA Annual Meeting Extended Abstracts 2012*.
- 今西一太 (2020) 「フィリピン型言語の能格論争に関する一考察」言語記述研究会第 104 回例会における口頭発表.
- Liao, Hsiu Chuan (2004) *Transitivity and ergativity in Formosan and Philippine languages*. PhD. thesis. University of Hawai'i.
- Seržant, Ilja A., Katarzyna Janic, Oneg Ben Dror & Darja Dermaku-Appelganž. (2021) "Typology of coding patterns and frequency effects of antipassives." *Studies in Language* 1–56.
- Teng, Stacy Fang Ching (2008) *A reference grammar of Puyuma: an Austronesian language in Taiwan*. Pacific Linguistics, 595.
- Wu, Joy Jing-lan (2006) *Verb classification, case marking, and grammatical relations in Amis*. The State University of New York at Buffalo, PhD thesis.